



# 羅針盤

大谷 道輝

Michiteru Ohtani

佐々木研究所研究事務室 室長



## 外用薬の剤形選択 Q&A

アトピー性皮膚炎や乾癬などの皮膚疾患における薬物療法では、生物学的製剤の登場により患者満足度や治療効果が飛躍的に向上しており、外用療法を疎かにする処方が増加している印象を受けます。生物学的製剤は次々と新たな医薬品が承認されていますが、いずれも痒みの抑制効果が高く、患者の満足度が高いことから、併用している外用薬のアドヒアランスが低下し、皮疹が悪化する症例が散見されています。そのため、外用薬のアドヒアランスの向上と維持が大切となります。この外用薬のアドヒアランスの向上と維持には、「剤形」の理解が不可欠です。外用薬は、従来から疾患や部位などを考慮して、同じ主薬でも多くの剤形が開発されています。最近では、アドヒアランスなども考慮して、使用感や利便性に優れた「フォーム」や「シャンプー」など新しい剤形も開発されています。

剤形が豊富であることは、臨床現場において選択肢が増えて患者に最適な剤形選択が可能となる一方、剤形に関する理解や知識が不十分であると、選択が困難になることがあります。とくに新しい剤形は、医師や薬剤師をはじめとした医療従事者でも理解や知識が不足している傾向があります。2023年の剤形選択や変更に関する報告でも、医療従事者から患者や家族に対し、利便性などに優れた新しい剤形に関して情報提供が少ないことから、これらの剤形へ変更が可能であっても、変更されない症例が多いことが示されています。また、外用薬の患者に対する指導では、「外用指導してくれているととて

も感じる」と回答した患者の割合は8.7%にすぎないことが報告されています。

このような背景において、外用薬のアドヒアランスに関する研究は長く行われており、患者への教育指導や外用指導の有用性が数多く報告されています。これらの報告では、医師以外の学会認定皮膚疾患ケア看護師などのコメディカルとの情報共有や活用などの有用性が示されているものの、剤形に着目したアドヒアランス改善に関する報告は限られています。

そこで、日常診療を中心とした実践的な企画として、「外用薬の剤形選択 Q&A」と題して、外用薬の基礎から各疾患別の剤形の使い分けまで幅広く学べることを目的としました。目次をご覧くださいいただければ一目瞭然ですが、第一線でご活躍の先生方に執筆をお願いしました。執筆いただいた先生方に深謝するとともに、本特集が皮膚疾患に携わる先生方の日常診療に少しでもお役に立てれば幸いです。

### 編者略歴

大谷 道輝 (おおたに みちてる)

1983年4月 東京大学医学部附属病院薬剤部  
 1996年10月 東京逓信病院薬剤部 部長代理  
 1997年7月 薬学博士取得 (東京大学薬学部)  
 2000年1月 東京逓信病院薬剤部 副薬剤部長  
 2017年4月 杏雲堂病院診療技術部部长 兼 薬剤科長  
 2019年4月 東京薬科大学 客員教授  
 2021年4月 公益財団法人佐々木研究所  
 研究事務室長  
 2022年4月 公益財団法人佐々木研究所  
 研究事務室長 兼 人事・IT部 部長  
 現在に至る